

実践倫理

武徳

(二八七八―一九四二)

前田光世(コンデ・コマ)

一千戦無敗の男

“柔道と開拓”

野木將典

はじめに

講道館柔道創設者嘉納治五郎は「月刊国士」の創刊の目的において塾生や修行生に対して次のようにのべている「維新後、わが国は外国の文物を吸収して急速に近代化されたとはいえ、なお文化、政治、経済、国力を欧米各国と肩を並べて遜色のないところまで高める事が緊急のことである。これには国の現状と将来を自覚し、その実現に努力する人、すなわち国士を一人でも多く作る必要がある」と、つまり嘉納は「国士」一身を捨てて国のために尽くす人を育てるために、何人もの若者を講道館から世界に送り出し、異文化のエキスを吸収する事と日本の文化、精神を異文化に紹介する事を使命に課している。「前田光世」もその一人であった。ここでこの産経新聞掲載（平成十三年八月二十九日〜九月五日）日本人の足跡前田光世コンデ・コマ（一〜七全文）をとり上げた理由を二つ上げておきたい。

その一つは文末にある。前田光世は生前（小生の死体が墓の下に朽ちて白骨となった頃、此の辺に日本人前田コンデ・コマの墓標はある筈だと、繁栄した同胞移民の手で苔の生えた、小さな墓標が探し出される目があることを信ずる。その時小生の靈魂は不滅に残って自分の信念が貫徹されたことをどんなにか喜ぶ事であろう……）と有るが実はこの朽ちた墓を改造してほしいと申し出たのがアマゾン国士館高拓生の引率教官で日系人の指導者であり前田光世氏と親しかった友人の越知栄先生であった。昭和五十六年八月二十七日国士館大学ブラジル訪問団によって、その墓が立派に改裝され盛大に慰霊祭が行なわれ、哀悼の意を表した不思議な縁があったことをまず上げたい。

二つには前田光世（コンデ・コマ）はただ単に柔道家にとどまらず明治三十七年出国以来一度も帰国することなく、その後年はアマゾン移住の日系人の為にその生涯をささげ、前田の闘いは実は日本人の誇りの伝承だったのである。つまり柔道の技を通して日本人の誇りを伝えたのである。これこそ私が提唱する武徳（武道、武士道から生れる正義と勇氣と礼と節）そのものではないだろうか。今日の日本人、特に武道人はこの前田光世コンデ・コマの姿を真摯に受けとめたいものである。

平成一四年三月

◆無敗の男 二つの戦い柔道と開拓

異種格闘技戦、一千戦無敗。

戦績と呼ぶには、あまりに完璧な数字だ。

そもそも勝負とは、一〇〇％勝つ人間が存在しないからこそ成り立つのではないか。それに勝敗は、運、不運に左右されるものだ。それが、肉体のぶつかり合う格闘技ではなおさらだろう。

だが、その男は負けなかった。

二十世紀初頭、世界中で異種格闘技戦を行い、無敗を誇った柔道家がいた。前田光世（みつよ）。海外では、コンデ・コマといった方が通りがよい。そのあまりの強さに、人々は敬意を込めて、スペイン語で「伯爵」を意味する「コンデ」の尊称を付けた。身長一六四センチ、体重六五キロの小柄な体で、時には二メートルもあるレスラーやボクサーと戦った。

多くの国で、日本の領事館がなかった時代だ。言葉も通じず、政府の庇護もない状況で、北アメリカ、ヨーロッパ、中南米の国々を十年以上渡り歩いた。

まだ人種差別が色濃く残る時代で、勝った後に試合場の外で襲われる危険もあった。そして戦い続けるうちに、北米などで高まる排日感情を目の当たりにし、次第に日本人の将来について考えるようになる。

〈そもそも小生武者修行の思い立ちは、排日問題に憤慨し、どこかに、我が民族発展の地を見出さんとしたのが動機です〉（昭和六年、友人の佐渡亮造への手紙）

前田はその後、長い旅の末に出合ったアマゾンの密林を、日本人の新天地と定め、開拓事業に身を投じる。

四十歳を超え、柔道家として一線を退いたころには、数カ国語を操る一角の国際人に成長していた。アマゾン川河口の町、ベレンに定住。ブラジルと日本の政府を動かし、ついに日本人の入植を成し遂げ、「開拓の父」と呼ばれるまでになった。

初の日本人移民がアマゾンに入植した直後の一九三〇（昭和五）年、前田は友人に宛てた手紙で、開拓に対する思いを次のように綴っている。

〈小生は柔道の方から考えても自己民族の発展ということを勝負の理論に基づきて凡ての上に必勝を期して進まなければならぬ

と信ずる。吾々は競争の敗者となつてはならぬ」

前田にとって、「開拓」は「柔道」の延長線上にあった。「小よく大を制す」柔道の方法論を、日本という国に重ね合わせようとしたのかもしれない。

異種格闘技戦も、アマゾン開拓も、だれに頼まれたのでもない。前田自身が選んだ戦いだった。二メートルのレスラーも、未開のジャングルも、相手にとって不足はなかった。

生きること、前田にとってそれは挑み戦うことに他ならなかった。

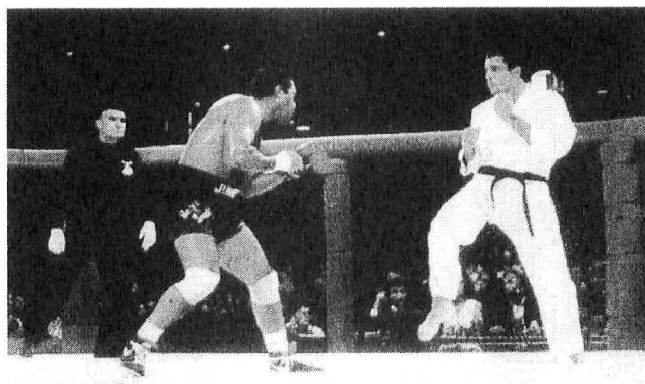
前田が世界に飛び出してからすでに一世紀近くがたつ。二度と故国の土を踏むことがなかった柔道家の名は、日本人の記憶から完全に消え去ろうとしていた。

八年前のあの日までは。

一九九三（平成五）年十一月十二日、アメリカ・コロラド州デンバー。金網に囲まれた八角形のリングの上で、「ジ・アルティメット・ファイティング・チャンピオンシップ」（UFC）と銘打たれた格闘技の試合が行われた。目突きと急所攻撃以外は何でもありという、まさに「アルティメット（究極）」なルールが用いられ、「最強」を競う一つの方法として、格闘技史に残る大会だった。「最強」の称号を手に入れようと、世界中から名立たる格闘家たちが集まった。ほとんどルールの存在しないリングでは、凄惨な試合が予想された。実際、拳を骨折したり、血まみれになる選手が続出した。

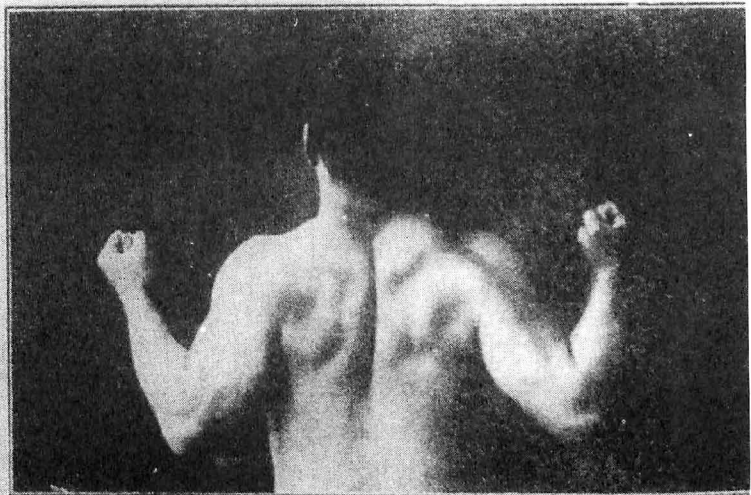
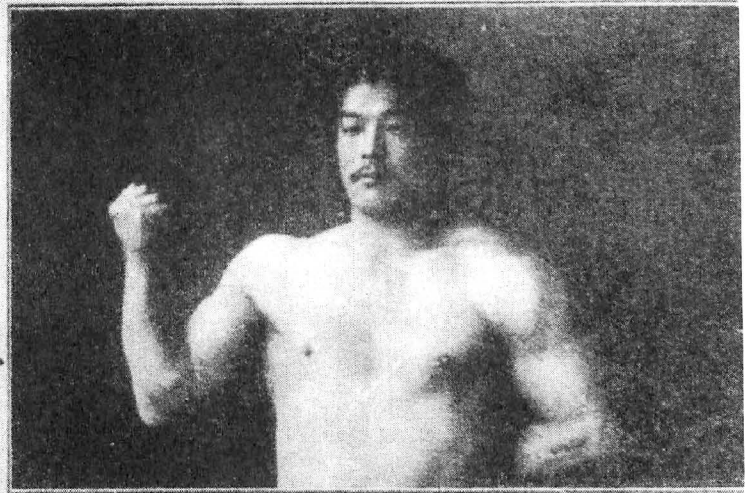
だがその中でただ一人、かつての前田のように「小よく大を制す」戦いを繰り広げ、やすやすと優勝した選手がいた。参加者の中で最も軽量で、まだ無名だったホイス・グレイシー（当時（二六）歳）だ。彼の一族の名を冠するグレイシー柔術の使い手だった。

ホイスは、名の通ったプロレスラーや空手家、ボクシングの世界ランカーを、長くても二分のうちにすべて絞め落としてしまった。



UFCでボクサーのアート・ジマーン（当時のIBFクルーザー級北米王者）と対戦するホイス・グレイシー（93年11月12日、アメリカ、コロラド州デンバー）『格闘技通信』提供

早稲田大学 第一高等學校 學習院 高等師範 陸軍幼年學校 師範
 筋肉發育の狀態圖
 明治三十七年 外遊 時の段四



講道館七段前田光世

身長五尺四寸

二三

青森県中津輕郡船沢村富栄出身 体重十八貫
 明治三十七年十月十八日生 昭和十六年十一月十八日没
 (南米ブラジルシテウキ)

ウエート・トレーニングの概念すらなかった当時としては、見事に発達した筋肉を誇った前田光世（講道館図書資料部）提供）

そして、傷一つない顔で試合後のインタビューに答えるホイスの口から、意外な名前が飛び出した。

「我々グレイシー一族は最初、ブラジルのベレンで、コンデ・コマという日本人から柔術を学んだ」

今、世界的に最強の格闘技の一つとされるグレイシー柔術の始祖こそ、前田光世だった。

その翌年に行われた第二回UFCにも、ホイスは優勝。さらに、ホイス以上の実力を持つといわれるヒクソン・グレイシーら一族の選手が次々とベールを脱ぎ、同時に「他流試合は戦場の戦いだから、腕を折られても降参しない」というグレイシー柔術独特の哲学にも注目が集まった。格闘技界では「打倒グレイシー」が合言葉となり、前田の名も当たり前のように語られるようになった。

私もこうして、前田の名を耳にするようになった。当時、大学生だった私は総合格闘技に熱中していた。特に第二回UFCには、同じ格闘技団体に所属する先輩が出場したが、ホイスに五分で絞め落とされてしまった。その先輩の圧倒的な戦績、肉体、技術を身近に知っていただけに、驚くというより、虚脱感に襲われたことを覚えている。

明治の柔道家が伝えたサムライの技と心が、地球の裏側でブラジル人に脈々と受け継がれていたことに、日本の格闘技ファンは大きな衝撃を受けた。

そのブラジル人たちは、日本人が忘れかけているサムライの魂を確かに持っていた。

『格闘技通信』の朝岡秀樹編集長（三三）は言う。

「グレイシー一族の戦い方は、勝負を命のやりとりとして捉える武道の原点を示しました。スポーツマンではなく、サムライとしての彼らの姿が、その原点たる前田への関心を高めることにつながったのです」



◆ヴァーリ・トゥード (vale tudo) ブラジルの公用語であるポルトガル語で、「何でも有効」という意味。

グレイシー柔術に特有のルールというわけではなく、元来はレスリングやカポエラなどさまざまな格闘技が盛んなブラジルで、他流試合に用いられてきた。

殴る、蹴る、投げる、絞める、関節を極める、という格闘技のあらゆる技が許される。武器を使わないケンカと考えた方がわか

りやすい。「ジ・アルティメット・ファイティング・チャンピオンシップ」(UFC)で用いられ、世界的に知られるようになった。日本で近年、同様のルールで、試合が行われるようになり、格闘技雑誌では盛んに使用され、基本用語として浸透している。ブラジルでは、古くは一九三一年にホイス・グレイシーの父、エリオがボクサーを数秒で破っており、一九五〇年代には、グレイシーの選手が他流派の選手と対戦するテレビ番組が登場。結果的に、ヴァーリ・トゥードはグレイシー柔術の名声を高めることに貢献した。

しかしUFC以降、ヴァーリ・トゥードが世界的に広まって選手層が厚くなり、グレイシーの選手が敗れることも珍しくなくなっている。賞金を目当てにする本場ブラジルの格闘家たちは、格闘技の盛んな日本など海外に活躍の場を求める傾向にある。

その一方、「危険で残酷だ」という理由から近年、アメリカの多くの州が法律でヴァーリ・トゥードを禁止するようになった。

◆「大彗星」現る 快男児育んだ明治の鼓動

雲の上に、雪の残る山頂が突き出していた。津軽平野から望む岩木山は、周囲の山より飛び抜けて高く、神々しい。

「津軽富士」と呼ばれるその山から視線を落とすと、そこにはリング園が広がっている。一隅に「前田光世生誕の碑」がひっそりと建っていた。

一八七八（明治十一）年十一月十八日、青森県中津軽郡船沢村（現、弘前市）で、裕福な農家の跡取り息子として前田光世は生まれた。本家の血筋は前田の代で途絶えているが、近くには今も、分家が数軒残っている。

そのうちの一軒、前田八千穂（はちほ）さん（五一）の家で、古い前田の写真に出会えた。おそらくは三十代の写真である。袖（そで）の短い、古いタイプの柔道着が、引き締まった肉体をびったりと包んでいる。八千穂さんの家の柱に、戦前から貼られていたものだという。

しかし八千穂さんですら、こう言った。

「光世のことはあまり知らないんだ。この写真も、小さいころはだれかなあって、思ってたぐらいなんだよ」
百年近く前に故郷を離れた柔道家の姿は、人々の記憶からほとんど消えていた。地元の研究者も近年、次々と鬼籍に入ってしまったという。

ただ八千穂さんは、祖父の金作さん（明治三十八年生まれ）が、村の長老たちと交わっていた「噂（うわさ）話」を覚えていた。「なんでも光世が外国に出たのは、明治天皇を投げ飛ばしたからだって、しゃべってたっけなあ」

むろん、学習院で柔道師範をしていた前田にしても、ありえない話である。前田について研究していたという金作さんなら、承知のことだったはずだ。

だが、そのエピソードからは、いかにも明治人らしい剛毅な人柄が伝わってくるのではないか。

金作さんはきっと、それを楽しんでいたのだろう。

前田の性格には、当時の世相も大きく影響していたと思われる。

日清戦争直前の一八九三（明治二十六）年、十四歳の前田は弘前高校（当時の青森県尋常中学校、後の旧制弘前中学）に入学。

二度の留年を機に上京し、早稲田中学に編入した。

このときの状況は、家族の反対を押し切って家出同然のことだったというから、何か大きな決意を胸に秘めていたにちがいない。戦争でナショナリズムが高まり、尚武の精神が奨励された時代だ。少年たちが勇ましい夢を語り合ったことは想像に難くない。

特に前田の周りには、いつも志を持った友人たちがいた。青森時代には、工藤十三雄（衆院議員）、藤田重太郎（青森県議会議長）、薄田斬雲（すぎださんうん）（作家）らがいた。早稲田中学に入ってから、押川春浪（『冒険世界』『武俠世界』など主宰）、押川清（後楽園球団会長、最初に野球殿堂入り）の兄弟など、後に世に出る傑物たちと親交を深めた。

「大陸に渡って馬賊か海賊になりたい」

前田は、海外雄飛の夢をこう語っていたという。

上京した前田は、早稲田大学（当時の東京専門学校）に新築されたばかりの柔道場に通い始め、一八九七（明治三十）年六月には、講道館に正式に入門した。

小学生のときには米二俵（一二〇キロ）を担ぎ上げ、仲間からは「相撲ッ子」というあだ名で呼ばれた才能は、入門一年半後には、早くも講道館幹部から一目置かれるようになった。

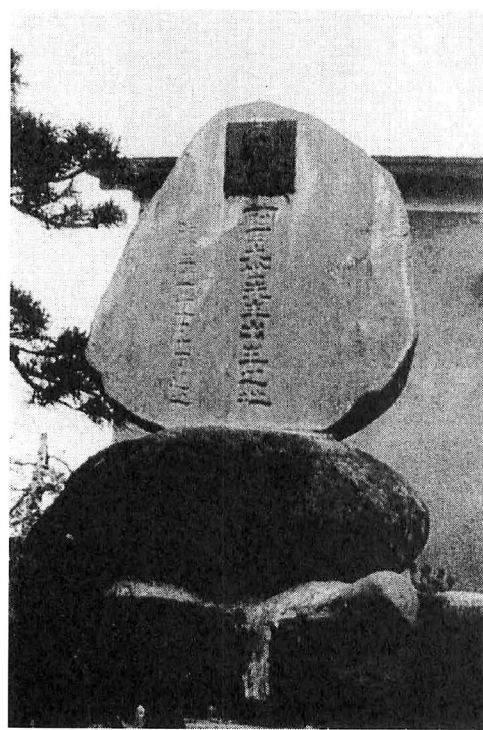
（明治三十一年（十二月）の無段者の月次（つきなみ）勝負の日、

突然一つの大彗星（すいせい）が現れた）

杉浦和介（後の八段）は、前田の鮮烈な登場を興奮気味に回想している。

杉浦によると、白帯の下位である乙組から勝ち上がってきた前田は、黒帯前の上位陣である甲組まで相手にしながら、三本勝負で十人抜きという記録をつくった。

（あまりに見事にタタキつけられ『ウン』と一声、暫時起き上がれ

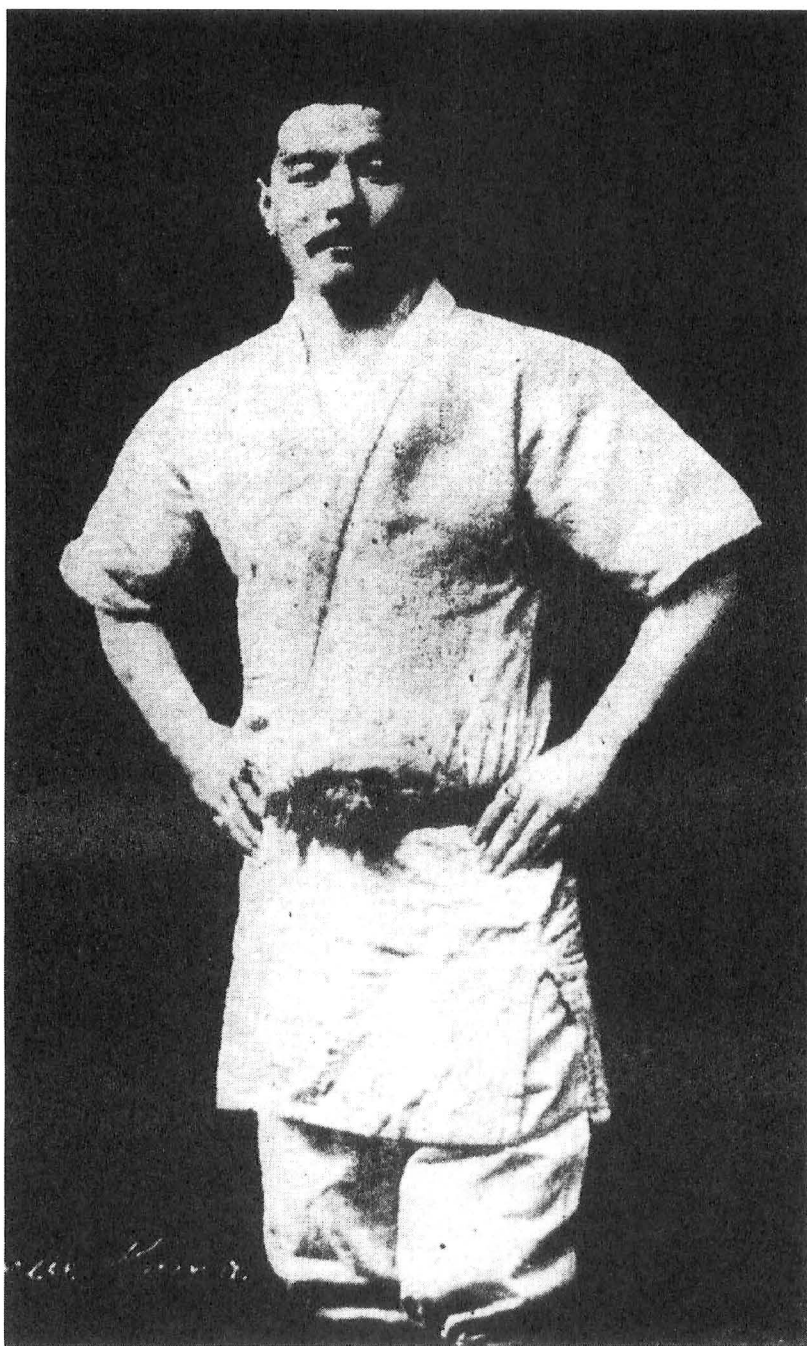


リング園の中に「前田光世先生出生の地」と記された記念碑が建っている
〓 今年5月、弘前市富栄

なかった」

杉浦自身の言葉である。

この活躍が認められ、翌年正月の鏡開式で、前田はそのまま初段を与えられた。さらにその年のうちに二段になった。当時は有段者がまだ少なく、黒帯の重みは現在とは比べものにならなかった。一年間に二度の昇段は極めて異例のことだったらしい。



青森の分家に伝わる光世の写真。左下には「Conde Koma」（コンデ・コマ）と記されている（前田八千穂さん提供）

講道館図書資料部の村田直樹部長（五二）は、次のように分析する。

「前田の記録を見る限り、非常に技能が優れていたことが推測できる。当時は技有りも効果も認められておらず、勝負は一本でしか決まらなかった。それを勝ち抜いていくことは、体力だけでできることではない。実際はすでに三段ぐらいの実力があつたのではないか」

早稲田大学に進んだ前田は、神田で柔道仲間と暮らしながら、さらに柔道にのめり込んでいく。

そして、転機が訪れた。

講道館四天王の一人、富田常次郎が、柔道普及のため渡米することになり、これに随行することになったのだ。

嘉納治五郎・講道館館長は「富田六段、前田四段、合わせて十段がよい」と、それぞれを昇段させて渡米を許可した。

日露戦争最中の一九〇四（明治三十七）年十月、横浜港から「伊予丸」に乗り込んだ。

「戦場では、自分と同じ年ぐらいの兵士たちが次々と命を落としている。自分も柔道を通じて日本の名誉のために命をかけよう」

外国人と戦う覚悟はすでにできていた。ただそれが千回以上にも及ぶことになろうとは、このときはまだ想像もしていなかった。



◆ばん（蛭）カラ 前田の学生生活は、早稲田はもちろん、青森時代から相当、ばんカラ（ハイカラをもじって対応させた語）だった。弘前高校百年史によると、当時の生徒はエリート意識が強く士族階級の子弟が多かったことから、英雄豪傑を気取る者が目立った。教室の隅には煙草盆が置かれ、卒業式には酒も出た。中学生は、大人として扱われたのだ。

大半の生徒が高下駄をはき、太い棒を持ち歩いていた。前田の在学中に制帽の着用は義務づけられたが、中折れ帽やナポレオン



前田が通ったころの講道館。当時は下富坂（現、文京区小石川）にあった
〔講道館図書資料部〕提供

帽を被る者までいたという。

当時の新聞には「中学生が登楼して質屋に夜具を抵当セリ」などあり、前田の周りにはかなり型破りな生徒が多かったようだ。

◆講道館柔道 天神真揚流、起倒流などを学んだ嘉納治五郎が一八八二（明治十五）年、柔術の長所を採り入れて創始した。

その草創期には、富田常次郎、西郷四郎ら四人の高弟が「四天王」として名をはせた。富田の息子は作家の富田常雄で、西郷をモデルにした小説『姿三四郎』は有名。前田は、四天王に次ぐ発展期の世代に属し、当時際だった強さを見せた轟祥太、佐村嘉一郎と合わせて「三羽烏（がらす）」と呼ばれた。

こうした若い柔道家に嘉納は「日本は古くは中国や朝鮮から、近くは欧米の文物を輸入して自国の発展に資した。他国より学ぶだけではなく、教えることもしなければ、国際間の威信を保つことはできない」と、海外で活躍するように説いた。前田の行動には、嘉納の影響が色濃く見られる。

◆武者修行と普及活動 大男投げ飛ばす痛快な姿

「だれとでも喜んで勝負する」

前田光世（みつよ）はニューヨークで道場を開きながら、新聞にこんな挑戦広告を出していた。

一九〇四（明治三十七）年の暮れに意気揚々と渡米してから半年。陸軍士官学校や大学などで柔道紹介の機会を得たが、いま一つ普及のきっかけがつかめない。道場には定期的に入門者があったが、どれも長続きしない。強く投げつけられたりすると、次の日からもう来なくなる。

「レスリングかボクシングのチャンピオンと公開勝負をして、柔道の強さを証明しよう」

前田は実力で、柔道をアピールしようと考えてようになった。

七月になって、ようやく挑戦者が現れた。ブッチャーボーイという、名の通ったレスラーだ。試合は、(1)柔道着を着用する(2)投げ、絞め、関節技で戦う(3)勝負は両方の肩がマットに付くか一方が降参するまで—というルールで三回勝負と決まった。

ブッチャーボーイは身長一八〇センチ以上、体重は前田の二倍近い一一〇キロという巨漢だ。

「負ければ、米国で日本柔道の浮かぶ瀬はない」

決死の覚悟で臨んだ試合は、予想外に一方的な展開を見せた。体落とし、巴（ともえ）投げ、浮き技―。前田はこの巨漢を何度も宙に舞わせた後、苦し紛れの腰投げをかわして逆に投げ返し、両肩をマットにつけた。続く二回戦では、もつれて倒れたところを前田が腕の関節を極めるとブッチャーボーイの腕の筋が伸びてしまった。

それぞれが、八分十秒と三分十五秒。終わってみれば、あっけない結果だった。

この初の公開試合をきっかけに、前田の名は知られるようになり、その後、対戦相手に不自由しなくなった。

小さな日本人が大男を投げ飛ばす姿は、当時のアメリカ人の目には、日露戦争に勝利したばかりの日本の姿と重なり、柔道普及の強い追い風となった。

一九〇七（明治四十）年二月、前田は新たな戦いの場を求めて渡英する。

日本と同盟関係にあった当時のイギリスでは、すでに多くの柔道家が道場を開いており、レスラーと柔道家の試合もかなり行わ

れていた。柔道についての知識も広まっており、その分、柔道家についても研究されていたが、前田の連勝は止まらなかった。

イギリスでは、前田は初めてボクサーとも対戦している。相手はジャック・ブランドンという地元では有名な選手だった。

ブランドンはグローブを着用、前田は柔道着姿で現れた。満員の場内で、ブランドンの強さを知る観客たちが殺気立つ中、試合は始まった。

審判の合図で身構えた両者だが、互いになかなか自分の技をかけられない。ブランドンは鋭いパンチで前田を懐に入れさせないが、前田も致命打を許さない。

十分を過ぎたころ、前田は突然戦法を変えた。顔面と鳩尾（みぞおち）を両手で防御しながら、一気に相手の懐に飛びこみ、組み付いたのだ。

こうなっては、ボクサーはどうしようもない。そのまま押し倒されたブランドンは、腕の関節を極められて降参した。

勝つには勝ったが、試合後の前田の言葉は慎重だった。

「これでボクシングに勝ったとはいえない。もっともっと勝負してみなくては本当のボクシングはわからない」

その後、自身もレスリングやボクシングを練習し、その技術を吸収。

後には、ゴム製のマスクや相手をつかめる指の出るグローブなども考案している。

「驚くべきことに、前田の中では、すでに現在の総合格闘技に近いスタイルが確立されていたようです。このスタイルこそが、後にグレイシー柔術の源流となったのです」（『格闘技通信』の朝岡秀樹編集長）

連勝しながら、前田はどんな格闘技にも対応できる理想の柔道を創り上げていった。しかしそれは、技を制限しながら体育として定着しつつ



富田常次郎六郎

前田光世四郎

明治37年とともに渡米した富田常次郎（左）と前田
（『講道館図書資料部』提供）

あつた講道館柔道とは逆の道を行くことでもあつた。

その結果、前田の技を継ぐグレイシー柔術も、現在の柔道と大きく異なつていたのである。

世界の強豪たちと試合を重ねた前田は、いつも新しい技術を取り入れることに熱心だった。それだけに、日本国内の閉鎖的な柔道家たちの体質を嫌った。

少年誌『冒険世界』（明治四十三年八月号）に掲載された前田の手紙によると、帰国の際にはレスラー二人とボクサー一人を同行し、講道館に他流試合を申し込むつもりだったという。

〈嘉納師範閣下（講道館柔道の創始者、嘉納治五郎）にも前もつてご通知申し上げて置くつもりだ〉

大胆にも、自分の師に当たる嘉納に対して、宣戦布告ともとれる内容だった。講道館の幹部らは激高したにちがいない。講道館では他流試合を禁じていたため、ただでさえ前田のやり方に批判的な意見が多かった。

「柔道を見せ物にしている」

こんな声もあつた。

柔道普及への強い思いから行つた他流試合が、皮肉にも前田と講道館の溝を深めることになつたのである。

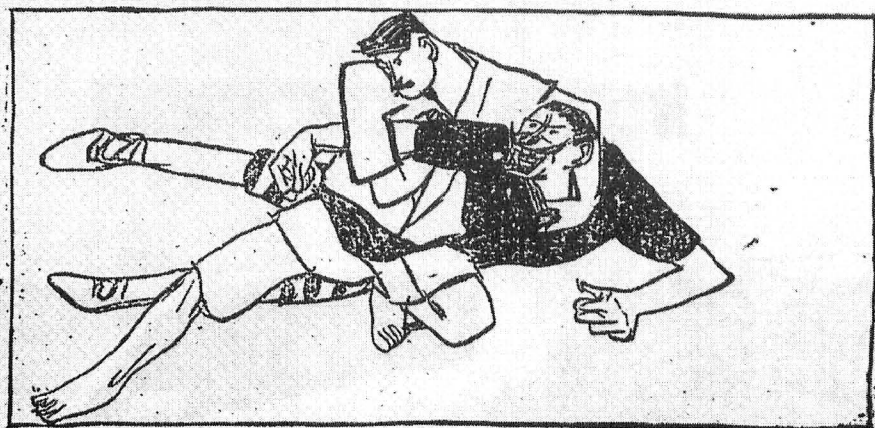
講道館図書資料部の村田直樹部長（五二）は、話した。

「講道館の文献に残る前田の技の記録と、日本にいたときの人望の厚さを考えれば、十分に十段になりえた人物だと思う。ただ、あまりにも先を



前田四段に組伏せられ無き法な逸力士

今夜の試合は前代未聞の華やかな勝利であつた



前田の活躍を伝える記事は、当時の少年たちの心を躍らせた（明治43年5月号『冒険世界』より）

行きすぎていた前田を、当時の日本国内から理解することは到底無理だった」

海外での柔道普及に計り知れない貢献をしながら、前田には結局、六段（死後に七段を追贈）までしか与えられていない。



◆ルーズベルト大統領と柔道 前田より一年ほど前に柔道家として初めて渡米した山下義韶（よしつぐ）は、親日家として知られたセオドア・ルーズベルト大統領に週二回、柔道を教えた。

ルーズベルトは、海軍兵学校の正課として採用を提案したが、提督たちの反対にあった。そこで山下

は、身長二メートル、体重一六〇キロのレスラーと対戦、これを二分で破り、柔道はやっと採用された。

しかし、試合を見るルーズベルトの観察眼は冷徹だ。その後に書かれた息子への手紙には、以前のような親日的な雰囲気はない。〈私は柔術を少しやってみて、この国のレスラーやボクサーなら、体力が十分にまさっているという単純な理由で、日本人を殺すことができるかと確信する。日本人は身長や体重のわりにはよく訓練され優秀であるが、力も強くて素早い相手に立ち向かうにはやはり小さ過ぎるのではないか〉

ルーズベルトの視線の変化は、米国内でその後起こる、排日の機運を反映していた。

ブラジルでは現在、リオデジャネイロを中心に、至る所にグレイシー柔術のアカデミー（道場）があり、アメリカでは、ヒクソンやホイスラエリオの息子たちが活躍している。



ステッキと手袋を手にした前田の紳士ぶり（「講道館図書資料部」提供）

◆日ごと高まる排日機運 異国で背負う日本の名誉

コンデ・コマ。

前田光世（みつよ）がこの変わった名前を名乗るようになったのは、アメリカ、イギリス、ベルギーを経て、スペインに遠征した一九〇八（明治四十一）年のことだ。

滞在先のバルセロナにマドリードから「日本一」を名乗る日本人柔道家が来たが、とても「日本一」を名乗るにはおこがましい実力だった。だから前田が挑戦するとなると、「日本一」は逃げ出してしまいうに違いない。そこで偽名で挑戦することにしたが、いいアイデアが浮かばない。

〈名前の妙案が出ないので困る、不景気で困る。困るから「前田コマル」と、考えたが語呂が悪い。そこで「コマ」でどうかとなった。これにスペイン人の友人が、「単にコマでは調子が悪い。百戦百勝なのだから、尊称をつけても恥ずかしくない」と、「コンデ（伯爵）」の尊称を付けたのだった〉（『世界横行 柔道武者修行』薄田斬雲に掲載の前田の手紙より）

「日本一」は結局、前田の正体に気付いて逃げ出してしまったが、「コンデ・コマ」という名前が気に入った前田は、その後もリングネームとして使い続けた。そして後にブラジルに帰化する際には、ついに本名となるのである。

コンデ・コマの名を得たバルセロナで、前田はキューバに住むスペイン人と出会った。その男からキューバにはまだ柔道家が来たことがないと聞くと、前田は「新領土を開拓するのも面白い」と、ロンドンに戻る予定を変更し、そのままキューバの首都ハバナに渡ってしまった。四年にわたる中米遊歴の始まりである。

このころが柔道家としての前田の全盛期だった。柔道講演を行い、飛び入りとの対戦も含め最初の半年で三百戦をこなし、メキシコとキューバを行き来した。

さらにアメリカやイギリスで活動していた仲間の柔道家を呼び寄せることで、柔道は絶大な人気を誇るようになる。当時の新聞には、柔道がほかのスポーツを追いつき落とす挿絵まで掲載されるほどだった。前田らの活躍によって日本人の評判は高まり、現地に住む日本人は胸を張った。

柔道普及が順調に進む一方で、前田の関心は徐々に国際問題に移っていった。特に、北米から押し寄せようとしていた排日の兆

しに心を痛めていた。

〈排日するところへは行くな。必ず中南米諸国中どこかに我々を歓迎し、また安住しうる地あらん〉

一九一二（明治四十五）年夏、日本人移住の候補地として注目されていた南米に入った。グアテマラを皮切りにホンジュラス、ニカラグアなど十数カ国を柔道講演で巡った。南米に根を張ろうとしていたわずかな日本人移民たちの心情を、二十六歳でブラジルに移住したアマゾン移民史研究家、堤剛太さん（五三）はこう代弁する。

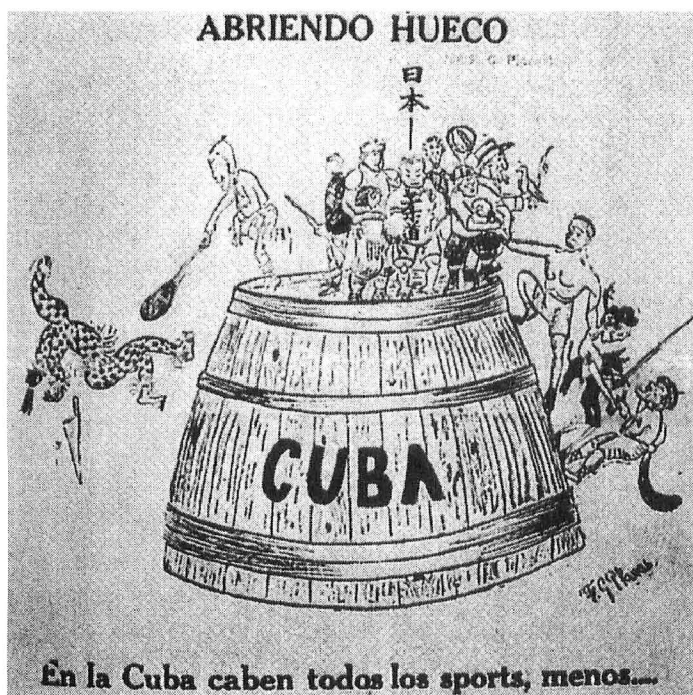
「移民というのは、かえって日本人としてのアイデンティティーに目覚めるものです。当時の移民が、コンデさんの活躍によってどれほど勇気づけられたかは計り知れない」

そして南米に入って三年、ブラジルに入った前田はリオデジャネイロを経て東海岸を北上。その後の人生を捧げる町、ベレンと運命的に出合う。

アマゾン川河口のジャングルの中に突然現れた西洋風の建造物が並ぶ都市に、前田は目を見張った。その日はちょうど、「入植三百年祭」が行われていた。フェイラ（市場）があちこちに開かれ、シルコ（サーカス）は子供たちの人気を集めていた。

しかし人々の最大の関心事は「アマゾン一の勇者」を決めるルチャ・リブレ（格闘技試合）だった。そこへふらりとやってきた日本人が、あっさりと優勝してしまった。審判が「コンデ・コマの勝利」を宣言すると観客はわき返った。その勇名はキューバ、メキシコあたりからすでに伝わっていた。

コンデ・コマを快く迎えてくれたアマゾンは、文明と未開の地の両



キューバの新聞に載った挿絵。柔道がほかのスポーツを追い落として

面を兼ね備えていた。ヨーロッパを彷彿とさせる町の外には、どこまでもジャングルが広がっている。加えて日本人が一人もいないため、排日運動も差別もない。赤道直下だというのに空気が乾燥していて思いのほか過ごしやすい。

「これこそが求めていた場所だ」

その後、アマゾンを知れば知るほど、その直感は確信に変わっていった。前田は「開拓」の夢を膨らませた。

堤さんは言う。

「コンデさんは柔道家として肉体が衰えると同時に、精神的に成熟した国際人へと成長し、うまく人生の目的を切り替えたのです」

柔道にしろ、開拓にしろ、常に前田を突き動かしていたのは強烈な愛国心だった。それを象徴的に示すのが、コンデ・コマと名乗る以前に「大和」と名乗っていたことだ。

前田の戸籍には、最初の渡米に際して旧名の「栄世」から改名した「光世」の名前しかないが、パスポートには確かに「大和」と記載されていたらしい。当時の新聞にも「Yamato」の表記が見られる。

前田自身が、ニューヨークの日本領事館でのパスポート発行の経緯について語っている。

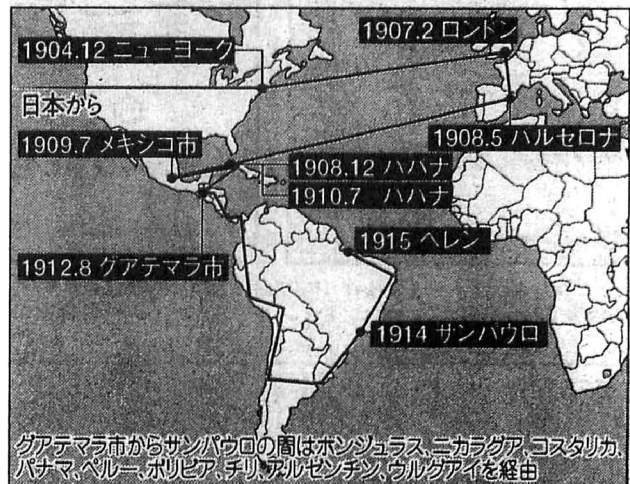
「証明書を発行して貰う時、僕は海外にいる日本柔道家を代表して、柔道に傷付けず勝負するから、『日本前田』とするからと云ってやったのだ。併（しか）しYamatoでは可笑しいからYamatoとしたのだ…」

前田は国の名を背負って戦っていたのだ。まさに「国土」というにふさわしい。



移民の心情について語る堤剛太さん。今年6月、ベレン

<前田光世ベレンまでの道のり>



東京都文京区の講道館図書資料部の研究室で、前田の国士ぶりについて村田直樹部長に聞いてみた。村田部長は笑顔を見せながら、講道館が一八九八（明治三十一）年に初めて創刊した雑誌を取り出した。その雑誌名は『国士』だった。

「嘉納治五郎は、語学堪能で、人格高く、技能に優れた人材によって柔道を普及させたいと考えていた。また柔道とは別に造士会という政財界の重鎮を巻き込んだ会をつくり、国の支えになる人材を育てようとした。前田がその影響を強く受けていたのは間違いない」



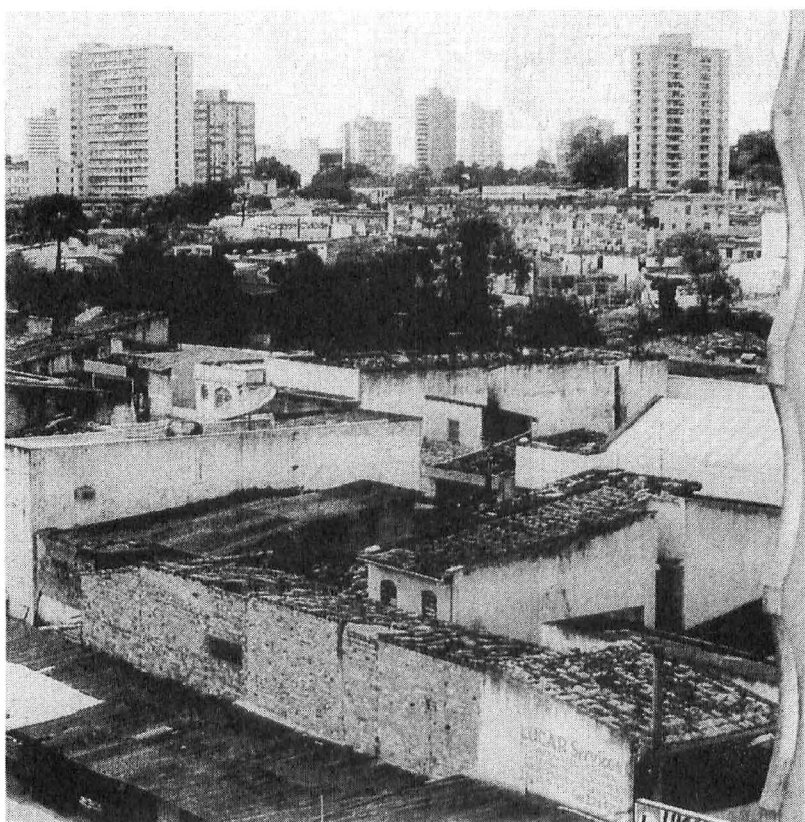
◆奇跡の国 日露戦争の最中の一九〇四年に前田光世が渡米した当時、日本は強国ロシアを退けた「奇跡の民族」として、好意を持たれていた。しかし戦争が終わると、好意は脅威に変わっていき、排日の機運が高まっていく。

一九〇六年にはサンフランシスコで、日本人を白人の通う公教育の場から締め出すという日本人学童隔離事件が起きた。当初はアメリカへの移住を考えていた前田がヨーロッパに活動の場を移したのも、こうした事件に失望したことが一因だったかもしれない。

その後もアメリカやカナダ西部では、農園の出稼ぎなどで、日本人の人口が急激に増加、白人に危機感を与えた。

そして一九二三年にはカナダが、日本人移民の入国禁止に踏み切り、翌年にはアメリカで排日移民法の成立に至った。

一方、前田が初めて中米にわたった一九〇八年ごろ、日本



アマゾン川河口のジャングルの中に広がる都市ベレン。前田はここで「アマゾンの勇者」になった

はまだロシアを破った“奇跡の国”として、人々は好意的だった。

『世界横行 柔道武者修行』（薄田斬雲）によると、キューバの首都ハバナを訪れた前田が町で「日本人はいるか」と尋ねると、「たくさん日本の雑貨店がある」との答えが返ってきた。町にはその言葉通り「横浜」「東京」「日本」などの看板が並ぶが、よくみると中国人の店だ。日露戦争後のこの時代、中国人までが“日本景気”に便乗するほど、日本への好感度は高かった。

こうした体験から、前田は日本人に好意的な南米にも目を向けるようになった。

◆グレイシーが継ぐ魂「腕が折れても屈しない」

一九二二（大正十一）年、中米遠征からブラジルのベレンに戻った前田光世（みつよ）は、いよいよ開拓に身を投じる決意を固めた。

ドイツ系イギリス人の妻、デイジー・メイ・イリスと結婚し、セレストというドイツ人の娘を養女に迎えた。四十三歳にして、やっと落ち着いた家庭生活が始まった。

マッサージ師や柔道教師として生活する一方、州知事をはじめとする土地の名士たちと交流を深め、日本人移民受け入れの準備を進めた。事業家として成功を収めていたガスタオン・グレイシーから、息子たちに柔道を教えるように依頼されたのは、このころのことだ。異種格闘技戦で磨かれた前田の技が、初めて本格的に伝えられる。

一九九〇年代から格闘技界の話題を独占してきたグレイシー柔術は、こうして生まれた。

前田はグレイシー一族に何を伝えたのだろうか。

その答えを探しに、ロサンゼルスを訪れた。そこには四十一歳という年齢ながら、現役の格闘家としていまだに四百戦無敗という戦績を誇るヒクソン・グレイシーがいるからだ。

前田にとっては孫弟子に当たるヒクソンは、レスリングやサンボ、ブラジリアン柔術の試合で数知れぬ優勝回数を誇り、百戦ものヴァーリ・トゥード（何でも有りの試合）を経験。高田延彦、船木誠勝といったプロレスラーをはじめとする日本人格闘家をすべて破っている。

前田と同じように無敗を誇り、「最強」と呼ばれるこの柔術家なら、前田の追求した「強さ」の意味を語ってくれるのではないか。

（思ったより小柄だな）

トレーニング着姿で取材に応じたヒクソンの第一印象だ。

身長一七八センチ、体重八八キロ。一般人としては立派な体格だが、彼がこれまで対戦してきた身長二メートル、体重一三〇キロの大男たちに比べれば、明らかに見劣りする。無駄の削（そ）ぎ落とされたコンパクトな筋肉は、その肉体を実際よりさらに一

回り小さく見せていた。

十一年前にブラジルからアメリカに渡ってきたヒクソンは、ポルトガル語訛（なま）りの英語で、インタビューに答えてくれた。

——まず柔術（グレイシー柔術を含むブラジリアン柔術）と柔道の違いについてどう考えますか

「柔術と柔道は、まったく異なるものです。正確には、ポイントを重んじる近年のスポーツ柔道とは大きく異なるのです。ミスター・コンデ・コマの時代の柔道は、当て身（突きや蹴りなどの打撃技）を含む、護身という点から完全な姿の柔道だった。それはむしろ、今日の柔術に近い実戦的なスタイルだったのです」

——ブラジリアン柔術におけるヴァーリ・トゥードとは

「格闘家が強さを試す最も有効な手段だ。サムライは刀を落としたときでも、素手で相手を殺せるように柔術を編み出した。それが究極の目的だ。だから、どんな技を使ってもいいヴァーリ・トゥードと、ブラジリアン柔術は深い関係にあるのです」

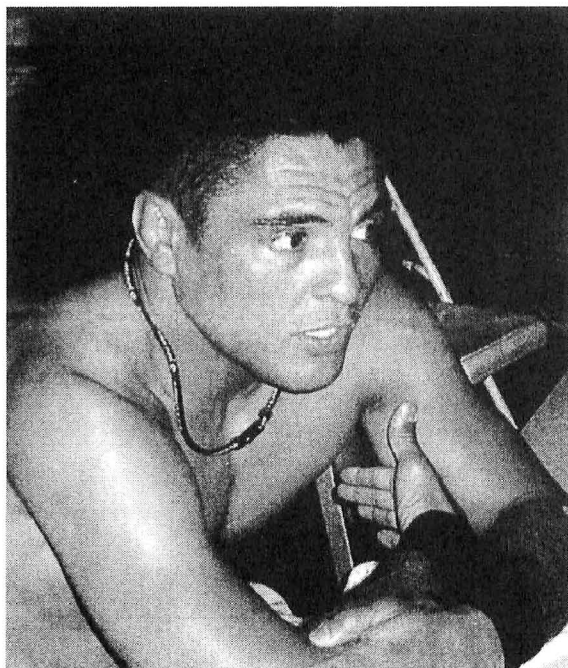
——グレイシー一族はギブアップしないといいますが

「すべてのグレイシーに関して、私はそうは言えない。もし私の息子が柔術の試合で、タップ（ギブアップの仕草）したといったら、それはオーケーです。なぜならそれはスポーツだからです」

——ではなぜあなたは、ギブアップしないと公言しているのですか

「私にとって戦うことはスポーツではありません。私はファミリーと伝統を背負っている。タップをしたら、私は自分を許さないでしょう。私は肉体より名誉を重んじます。だからたとえ、腕を折られたとしても、気持ちを折られなければハッピーです。私にとって柔術とは、スポーツ以上のものなのです」

グレイシー柔術の名誉を背負うヒクソンと柔道と日本の名誉を背負っ



トレーニング着でインタビューにこたえる「四〇〇戦無敗の男」ヒクソン・グレイシー 〇1年6月、ロサンゼルス

て戦った前田。無敗という共通点を持つ二人の姿がダブってみえた。

前田は、多くの異種格闘戦を行う過程で、どんな格闘技にも対応できる「柔道」を創り上げていった。

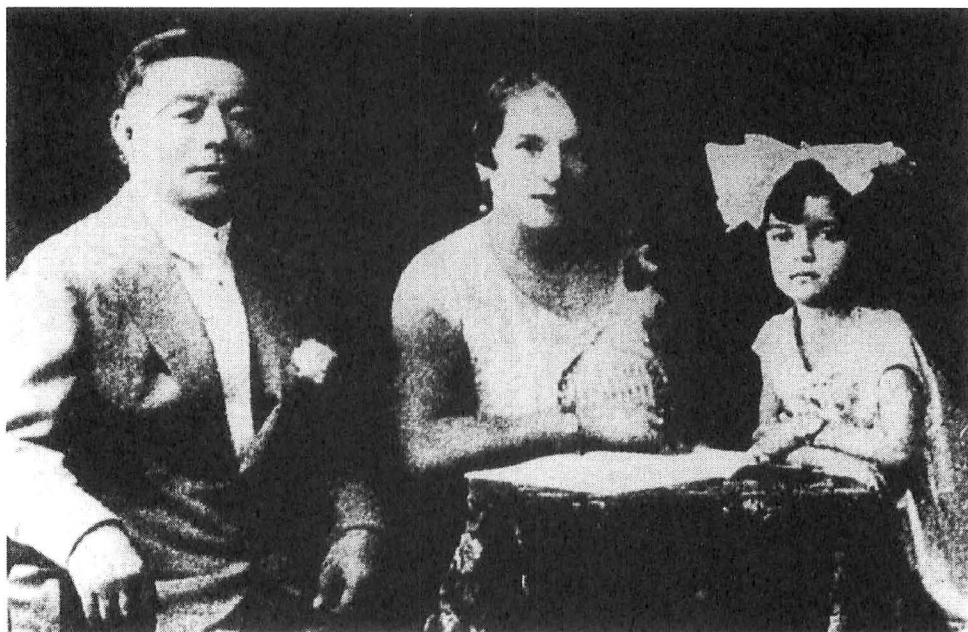
前田にとって、戦いにルールなどなく、同時に前田の柔道にもルールはなかった。だから前田はレスリングやボクシングを熱心に研究した。当時の柔道にはまだ当て身技が含まれており、前田は「ボクシングは柔道の一部である」とまで言っている。「何でも取り入れろ」というのが、柔道を教える前田の口癖だったという。

その「何でもあり」の精神はグレイシー一族をはじめとする、ブラジル人たちに引き継がれ、ブラジルでは柔道よりもブラジリアン柔術（ブラジルでは単に「juijitsu」と呼ばれる）が発達した。

そして、こうした実戦を尊ぶ姿勢の中で、グレイシー一族は、他流試合をスポーツとは明らかに区別し、命をかけるべきものと捉えるようになった。そのことが格闘技者として、グレイシーの選手たちの強靱な精神力のバックボーンとなったのである。

グレイシー一族の柔術家たちは、「柔術のためなら死ぬる」と口をそろえる。それは決して誇張や強がりではなく、彼らの生き方なのだと思わされる。ヒクソンの口からは、「ブシドウ」という言葉をはじめ、「忠誠」「名誉」「尊敬」などの単語が、次々と紡ぎだされた。

外圧にさらされた明治時代には、武士階級が廃止されたためにかえって武士道が理想化され、前田のような庶民にまでその精神が広く行き渡った。同



前田（左）とメイ夫人（中央）、娘のセレステ（右）（講道館図書資料部）提供

じように、グレイシー一族は、遠い日本に存在した武士道を理想化し、グレイシーの精神として昇華させてきたのだろう。だからこそ、柔道着をまとったこのブラジル人たちの言葉は、現代に生きる日本人の心を大きく揺さぶるのだ。

【ヒクソン・グレイシーの主な戦歴（全勝）】

（一九八一年からは全てヴァーリ・トウード）

一九七七年 十八歳で全ブラジルアマレスチャンピオン

全ブラジル柔術選手権階級別・無差別級チャンピオン

一九八〇年 サンボ・パンアメリカン選手権金メダル

一九八一年 ズール（ヴァーリ・トウード一四〇勝）に二R三分（チョーク）

一九八四年 ズール二R二分五〇秒（チョーク）

一九八四年 西良典（慧舟會）一R二分五八秒（チョーク）

ダビッド・レビキ一R二分四〇秒（TKO）

バド・スミス一R三九秒（TKO）

安生洋二（道場破り）六分四五秒（チョーク）

一九九五年 山本宜久（リングス）三R三分四九秒（チョーク）

中井祐樹（修斗）一R六分二二秒（チョーク）

一九九七年 高田延彦（キングダム）一R四分四七秒（腕十字）

一九九八年 高田延彦（高田道場）一R九分三十秒（腕十字）

二〇〇〇年 船木誠勝（パンクラス）一R一分四六秒（チョーク）

◇

◆グレイシー一族　グレイシー一族のブラジルにおける系譜は、一八〇一年にスコットランドからベレンに移り住んだ事業家、ジョルジ・グレイシーに始まる。数多くの外交官や政治家、ジャーナリストを輩出した名門の家系だった。

前田はベレンで、ジョルジの孫のガスタオンに様々な便宜を図ってもらい、その関係でガスタオンの息子たちに柔道を教えることになった。

長男のカルロスは特に熱心で、一九二五年にリオデジャネイロに移るまで約四年間、みっちりと手ほどきを受けた。

そのころ、弟のエリオ（ヒクソンの父）はまだ幼く、前田を見たことがある程度だという。

エリオはカルロスから柔術を学び、体重六三キロの小柄な肉体のハンディを克服するため、前田から伝えられた技術を大きく発展させ、今日のグレイシー柔術の基礎を築いた。

エリオは小柄ながら、一九五一年に当時の最強の柔道家、木村政彦に苦杯を舐めさせられるまで二十年もの間、無敗を誇った。

それまでの試合を、ほとんど三分以内で終えてきた木村は、体重が四十キロ近くも軽いエリオに三十分もてこずり、著書『木村政彦 わが柔道』の中ではそのテクニクを褒め称えている。

◆政府動かす「私設領事」アマゾン移民の道拓く

一九二九（昭和四）年九月七日、独立記念日を祝うリオデジャネイロに、日本からアマゾンへの第一回移民を乗せた大阪商船「モンテビデオ丸」が到着した。神戸港を発ってから四十日。移民たちは、希望と不安の入り交じった複雑な表情を浮かべながら、船着き場に降り立った。

ブラジルの港は、活気に満ちていた。

「ようこそいらっしゃいました」

聞き慣れぬポルトガル語が飛び交う中、よく通る日本語が聞こえた。声の主はスーツに身を包んだ小柄な紳士だった。

「私がコンデ・コマこと前田光世（みつよ）です」

前田はこの日、わざわざベレンから一週間の船旅を経て、出迎えに来ていた。

「この立派な人が、われわれの力になってくださるなら大丈夫だ」

移民たちは、胸をなで下ろしたという。

この四十三家族百八十九人の日本人はその後、沿岸航路線を北上。アマゾン川河口の町ベレンで準備を整え、さらにグアマ川を約二〇〇キロ遡上し、ジャングルの中の「トメアスー（当時はアカラ）植民地」に入植した。

前田が初めてベレンの地を踏んでから十五年。

「わが民族発展の地は、このアマゾニアなりと、死ぬまで叫びましょう」

固い決意で追いつけた夢の第一歩が、ようやく実現した。さすがの前田の表情にも安堵（あんど）の色が浮かんでいた。

一九二〇年代、試合から引退した前田は、軍や警察、一般人などへ柔道を教えるかたわら、マッサージ師として生計を立てていた。柔道を通じてベレンの上流階級に人脈を広げることになり、日本人移民受け入れの準備を進めるのに都合がよかったからである。

一九二六（昭和元）年、移住地としての適正を調べるため、土木技師らからなる「福原調査団」（福原八郎団長）が派遣された。アマゾンを訪れた福原は、前田の言葉から意外な事実を知る。

「この地は日本移民の好適地だから、州知事と相談して、移民のことを外務省に申し込みました」

つまり、外務省の要請で派遣された福原の調査団も、元はこの柔道家の発案によるものだった。福原は前田に絶大な信頼を寄せようになり、南米拓殖会社が発足してからは、福原が社長、前田が現地法人の取締役となって、「兄弟のように」（福原）力を合わせることになる。

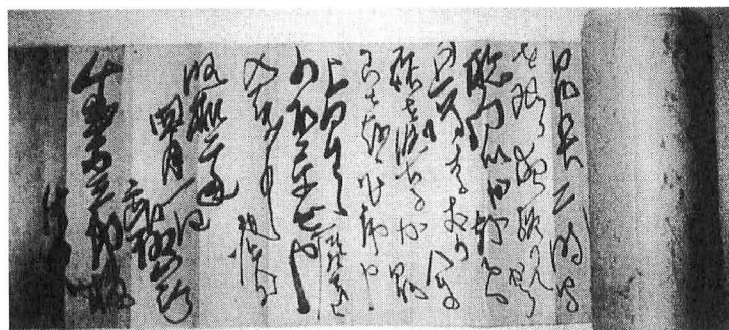
こうした前田の努力は外務省などにも認められていた。外務省が作成した功績調書には、次のようにある。

〈昭和九（一九三四）年ベレーン領事館開設迄ハ、在伯大使館の委嘱ニヨリ、又ハ自発的ニ在留邦人に対シ、各種ノ便宜供与乃至保護ニ当リ、事実上私設領事タルノ威アリタリ〉

こうした功績は当時のパラ州知事、ジオニジオ・ベンテスに認められ、前田は州政府からオーレン郡（ベレンの東約二〇〇キロ）に二万六〇〇〇ヘクタールの土地が無償譲渡されている。これは「コンセクション」と呼ばれる開拓権を与える契約だった。一九三〇（昭和五）年の革命で、前政府とのコンセクションは無効となったが、前田にだけは例外的にその後も継続する配慮がなされた。

前田の厚い人望は、新政府にとっても無視しがたいものであったことが窺える。

革命の翌年、その前田の土地に日本の若者たちが入植した。大嶽一さん（八九）は、その中の一人だった。大嶽さんは、明治生まれとは信じられないはっきりした口調で、当時の様子を



（下）昭和2年に前田光世が千葉三郎に宛てた手紙。文末に高麗（コマ）とある（汎アマゾンア日伯協会）提供

（上）熱帯の植物がうっそうと茂るジャングルⅡ01年6月、ベレン近郊

克明に語ってくれた。

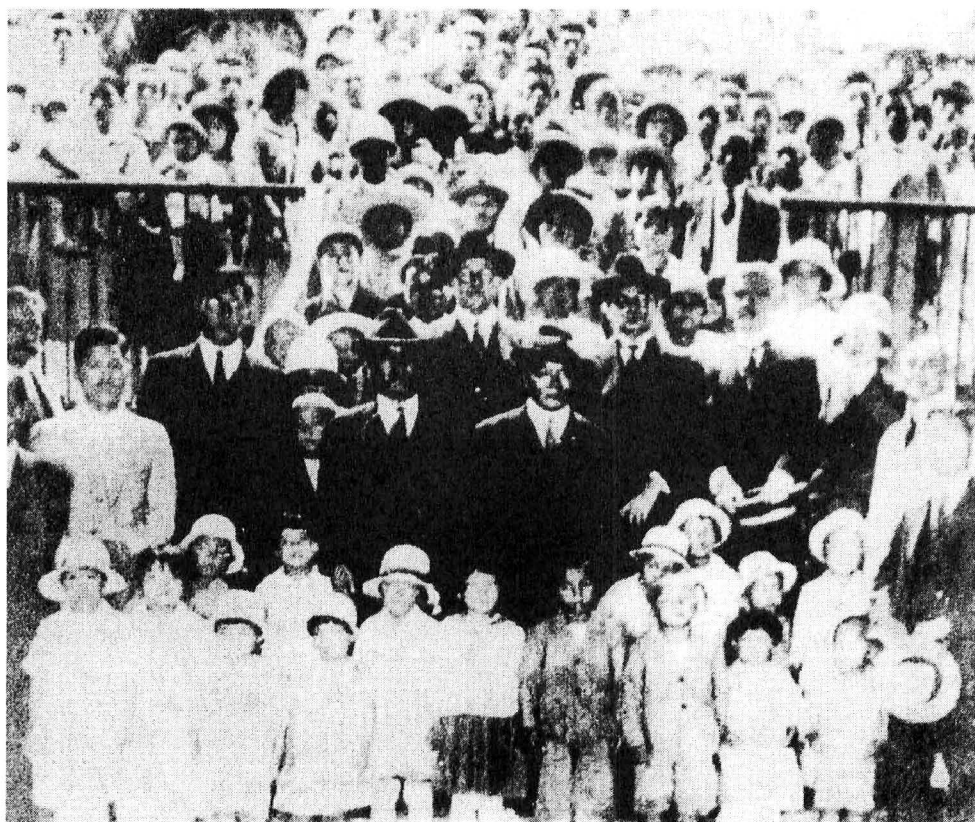
入植は苦難の連続だった。全員がマラリアで次々と倒れ、ジャングルの中の適正作物も見つからなかった。仲間は、ジャングルの生活に見切りをつけ、仕事を求めて町に出ていった。

「お前も戻ってきたのか」

一九三五（昭和十）年九月、ついにジャングルを飛び出し、ベレンに戻ってきた大嶽さんに、前田は肩を落としたという。このころ、アマゾンに入植した移民たちから脱耕者が絶えなかった。多くがサンパウロやリオデジャネイロなど、南の地域へ移っていった。前田は若者たちに「アマゾンに残れ」と説いたが、その窮状はよく分かっていて、アマゾンを開拓してほしいと願いながらも、脱落者は拒まない、というのが前田の姿勢だった。大嶽さんは、最初に金物屋、次には領事館での仕事を紹介された。

「コンデさんは津軽弁は話さないけれど、東北人らしい訥（とつ）弁な方でした。私に仕事を紹介するときも、いきなり来て、『大嶽、お前、領事館に行け』と、要点だけしか話しませんでした」

その年は、トメアスー入植地も揺れていた。入植開始から五年以上が経過したにもかかわらず、生活はかえって悪化し



リオデジャネイロに到着した第1回アマゾン移民と記念写真におさまる前田光世（中央）
|| トメアスー文化協会提供

ていた。移民たちの怒りは、南拓の社長、福原に向かった。植民者大会では、ついに福原に対して「責任を取れ」という怒号が巻き起こった。福原は陳謝したうえで、私財をなげうち、志半ばで帰国することになった。

ベレンの日系人支援組織、汎アマゾン日伯協会には、前田が千葉三郎（衆院議員、南拓役員）に宛てた手紙が保存されていた。

（トメアスー植民地は）大小に関らず騒擾繰り返して居ります実に情けない…福原社長の如きは昔日の倂（おもかげ）無く…病人の如きになりました、南拓社長たる公人の福原氏でなく大アマゾン開拓の同志、先駆者たる私人福原氏には此地を去り帰国の途に就く直前に逢に同情の涙はこぼれました…高麗（コマ）拝

第一回移民の準備段階から、共にアマゾン開拓を夢見てきた同志を失い、前田はさらに苦難の道を歩くことになる。



◆トメアスー植民地 元はアカラ植民地と呼ばれ、戦後にトメアスーと改称した。

入植当時はカカオを主作とする米作単一で、原始林を伐採して米を作るのが主な収入源だったが、経済的な苦境を打開しようと、トマトやキュウリ、ナス、大根などを作るようになった。そのため、日本人はジャポネーズと呼ばれる代わりにナীব（大根）とも呼ばれていたという。

しかし米、野菜の自給もできないうちに入植者が続々と増え、入植者の生活は立ち行かなくなる。衛生環境が悪化し、多くの入植者の命が失われた。

同植民地の英霊録によると、死因はほとんどが疫病で、犠牲者の多くが若者や幼児だった。

一九三五（昭和十）年には、南米拓殖会社の直営農場や農事試験場が廃止され、植民地を逃げ出す者が続出。同年に退耕した家族の数は十七で、その後も二十、二十五、十九、七十、六十九、十八、三十八という状況だった。



その結果、前田が亡くなった一九四一（昭和十六）年には残存家族は百三十六となり、入植者が三割にまで減る惨状だった。

ところが戦時中に増産したピメンタ（黒胡椒（コショウ））の価格が一九五一（昭和二十七）年に高騰。ピメンタは“黒いダイヤ”と呼ばれるようになり、戦前の苦境とは一転して、あちこちに豪邸が建った。

しかし生態系を無視した単一生物は、病害の影響を受けやすく、近年ではアセロラなど数種類の作物と一緒に植える混成農業が模索されている。

◆「開拓は勝負」最期まで 移民を思い望郷の念断つ

白いスーツにかんかん帽（麦わらを固く編んだ男性用の帽子）。これがコンデ・コマこと前田光世（みつよ）のトレードマークだった。

どんなに暑い日でも、几帳面（きちょうめん）にスーツを着て出かけたという。当時のベレンの町では、まだ車はほとんど走っておらず、前田は毎日、市電に乗ってベレン港近くにあった南米拓殖会社（南拓）に出勤していた。

人々からは、尊敬を込めて「プロフェッソール（先生）」と呼ばれ、町を歩くと帽子を脱いだり、被ったりで忙しかった。家族ぐるみで前田とつき合いがあった大嶽一さん（八九）はある日、愛想よく歩く前田に奇妙な癖があることに気づいた。

前田は曲がり角来ると、必ず少し大回りした。どうやら、本人は無意識のうちに、曲がり角の陰にだれか潜んでいないかを確認していたらしい。試合場の外で襲われることもあった若いころの癖は、抜けきることがなかった。晩年になっても戦いの姿勢が、前田の体に染みついていたのである。

それは前田の考え方についても当てはまる。

〈勝負の真理は正道に従って進む事である。アマゾン進出も此の正道に依らなければならぬ。之は私の堅い信念である。私の柔道勝負に臨む時の覚悟と同じものである〉（昭和五年、友人・薄田斬雲への手紙）

開拓に対する覚悟は、明らかに柔道に対する姿勢を基本としていた。前田にとって開拓とは「勝負」そのものだった。

長年、外国の地で勝負の世界に生きた前田にとって、心の安らぎは故国、日本だった。

そして一九四〇（昭和十五年）年、うれしい知らせが届いた。「皇紀二千六百年祝祭」に外務省の費用で、前田を招待しようという話が持ち上がったのだ。国の未来のために開拓事業に身を投じ、日本食や酒の味を何より懐かしんだ前田にとって、三十六年ぶりに帰国する絶好の機会だった。

しかし前田はこの話を断ってしまう。費用は外務省持ちであったにもかかわらず、帰国を心待ちにする日本の友人らにはこう弁解した。

「妻が内地へ帰る費用があったらそれで家を建ててくださいという、家族の前途を思うとその方がよいと思うから帰国は先に延

ばして家を建てることにした」

なぜ帰国しなかったのか。それは、移民事業が道半ばだったからではなかったか。

当時、トメアスー植民地では脱耕者が後を絶たず、入植者が三割にまで減少。幼い子供や若者が次々と風土病で死んでいった。「移民たちが苦しみ、死んでいくのは、元はといえば、自分がアマゾン開拓などという大それたことを考えたからではないか。自分の夢が彼らを苦しめているのではないか」

前田は自問自答を繰り返したに違いない。その「落とし前」として、望郷の念を自ら断ち切ったのではないか。こう考えてくると、入植地を飛び出してベレンの町で仕事を求める人々を見捨てずに世話した心情も、より理解できる。

最大の日本人入植地、トメアスーで脱耕者が増えるにしたがい、前田の体も徐々に蝕（むしば）まれていった。持病の糖尿病が悪化し、腎臓炎からくる尿毒症に苦しんだ。

そして真珠湾攻撃が約二週間後に差し迫った一九四一（昭和十六）年十一月二十八日、完成したばかりの家で、前田はついに六十三年の生涯に幕を下ろした。後に『開拓の父』と呼ばれる前田だが、その死は必ずしも安らかなものではなかったかもしれない。

前田の薄田への手紙の中には遺言めいた文句がある。

「小生の死体が墓の下に朽ちて白骨となった頃、此の辺に日本人前田コンデ・コマの墓標はある筈だと、繁栄した同胞移民の手で苔の生えた小さな墓標が探し出される日があることを信ずる。その時小生の霊魂は



（上）前田が晩年に建てた家Ⅱ01年6月、ベレン
（左）前田光世の家で養女らが保管していた写真（アメリカ・川本さん提供）

不滅に残って自分の信念が貫徹されたことをどんなにか喜ぶ事であろう……

トメアスー植民地が世界有数のピメント（胡椒（コショウ））の産地となり、「黒いダイヤ」ブームと呼ばれる大発展の時を迎えるまでには、前田の死からさらに十年を待たなければならなかった。

二〇〇一年、ベレン。

六十年の歳月は、前田が生きた痕跡をほとんどかき消していた。残っているのは、家と墓ぐらいで、その生涯は一部の日系人の間で細々と語り継がれる古い物語となりつつある。

前田が晩年に建てた家は、当時と同じようにオレンジ色の屋根を葺（ふ）いた瀟洒（しょうしゃ）な姿をしていた。しかし前田の死後、妻のメイが養女に迎えたクリービア・川本さんは、一家で日本に出稼ぎに出ており、家には血のつながらない親族が住んでいた。そしてこう口をそろえた。

「コンデ・コマは強い柔道家だった、ということ以外はあまり知らない」

ただ、部屋に飾られた柔道着姿の古ぼけた写真が、ここが前田の家であることを主張していた。

前田の墓は、市内のサンタイザベル墓地の中心部にあり、周りの墓より際立って大きかった。墓地の事務所によると、今でも時折、柔道関係者が訪れるという。最初の墓は傷みが激しく、ベレンで空手道場を営む町田嘉三さん（五五）らによって建て直されていた。

墓の建て直しについて説明しながら、ふと町田さんがつぶやいた。



サンタイザベル墓地にある前田の墓 01年6月、ベレン

「コンデ先生（前田）がベレンに来たとき、日本人はだれもいなかった。そして世界一のアマゾン川だよ。『開拓の父』とかいろいろいうけれど、世界一の流れが、男のロマンを追いかめたコンデ先生の心をとらえたんだと思うよ。きっと、何でも一番が好きだったんじゃないかな」
実際にアマゾン川の雄大な流れを見た後では、案外この武道家のシンプルな考えが真実を言い当てるのかもしれない、そう思えてきた。 〓おわり



一八七八（明治二一）十一月十八日（十二月十八日説も）、青森県船沢村（現在の弘前市内）で出生

九六（二九）青森県尋常中学校を中退、早稲田中学校に転入

九七（三〇）講道館に入門

一九〇四（三七）四段を与えられ、富田常次郎六段とともに渡米

〇七（四〇）イギリスへ。柔道指導と試合を行う

〇八（四一）ベルギーを経て、スペインへ。コンデ・コマを名乗る。さらに米国を経てキューバ、メキシコへ

一二（大正元）グアテマラから南米諸国へ。日本人入植候補地を回る

一五（四）ブラジル・ベレンに到着。中米へ再び遠征

二三（一一）ベレンに戻る。デイジー・メイ・イリスと入籍

二七（昭和二）外務省事務を委託される

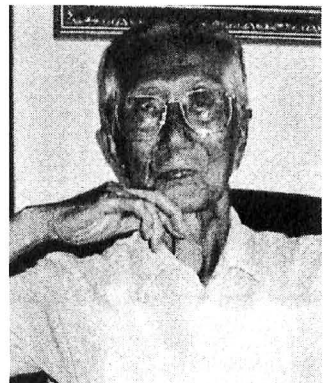
二八（三）南米拓殖会社の代行会社監査役に就任

三〇（五）ブラジルに帰化。私設大使と呼ばれる

四一（一六）腎臓病を患い、十一月二十八日ベレン市の自宅で死去

四二（一七）講道館が七段を追贈

前田光世の思い出を語る大嶽一さん
〇一年六月、ベレン市内の大嶽さんの自宅





◆あとかき 格闘技好きが高じて始まった今回の取材。しかし格闘技だけでは、とても前田光世の人生を読み解くことはできなかった。アマゾン、民族、開拓、移民……。前田の意外な素顔に迫るため、こうしたキーワードと「格闘」することになった。

〈日本内地におれば時々刻々の起り事に忙しく民族の将来のことなどは考える暇もありますまい〉

（友人、工藤十三雄への手紙）

前田の言葉は、そのまま私自身にも当てはまった。取材旅行では、国外から改めて「日本」について考えさせられた。前田が夢を賭けたブラジルの日本人入植地で、多くの移民と出会った。戦後に移住した移民一世たちも多かった。みんな黒々と日焼けして、握手する手はどれも分厚かった。酒を酌み交わしつつ彼らは言った。

「夢がなければ移民なんてやってられないよ」「日本が大変なことになったら、おれたちが食糧を送ってやるんだ」

過酷な環境で夢を追いかけてながらも遠い日本を思いやる彼らの姿が、前田と重なった。前田が愛したジャングルには、グレイシー一族にも負けない日本のサムライたちが確かに今も存在していた。

【主な参考文献】『世界横行 柔道武者修行』（薄田斬雲）▽『日本柔道魂 前田光世の世界制覇』（同）▽『前田光世 コンデ・コマの生涯』（前田金作、山本銀司）▽『柔道を創った男たち』（飯塚一陽）▽『明治バンカラ快人伝』（横田順弥）▽『パンパスのちぎれ雲』（菊池育三）「産経新聞掲載（平成十三年八月二十九日～九月五日）日本人の足跡前田光世・コンデ・コマ」（七全文）

（整理部 松浪健太）

追 録

ブラジル新聞紙上の訃報

前田氏の訃報は、ベレーン市の有力な新聞紙フォーリア・ド・ノルチ紙の十一月廿八日の夕刊に傳へられた。その大略は左の如し。

「日本柔道家前田光世氏、當ブラジルにおける惣稱コンデ・コマは、我がパラ州在留日本人中在留年限の最も古く、又その代表ともいふべき人であつたが、惜しむべし今晚六十三歳を以て逝去された。聲望高き同氏の死は氏を知る限りの人々に取つて痛恨事といふべきであらう。氏は、一九一五年著名なる武道家―柔術選手權保持者として當地に來つてより在留二十六年に及んだ。その當地到着前には、世界の諸國を遊歴し、玖瑪及び墨西哥では一九二一―二二年に驚嘆すべき日本武術柔道を以て其の選手權を獲得し、當パラ州に來てからも數知れず其の武技を公開した。

氏は、一八〇七年、十一月十八日日本國青森縣に生れ、東京の早稲田大學に學んだ經歷を持つて居る。遺族としては、夫人メイ・イリス・コンデ・コマと、當地醫大在學中の一女、セレステ・イリス・コンデ・コマ嬢がある。前田氏は、生前、南米拓殖會社支配人、又アマゾンア産業株式會社顧問であつた。尚ほ此の葬儀は本日午後四時ウイラ・ポロニア街四番地自宅より出棺執行される」

次に同新聞の報せる葬儀の模様は、その廿九日朝刊に左の如く記載された。

「我がパラ州全般の人々から、其の高潔な人格を敬慕されて居た名士――古い武道家コンデ・コマの遺骸は昨日サンタ・イザベル墓地禮拜堂傍らの特等地區に埋葬された。その葬儀は、ウイラ・ポロニア四番地の自宅を出棺し、此の忘れ難い死者を送くべく、知友の人々は自動車、バスを連ねて居たが、在留日本人の會葬者は、日本領事佐藤宣正氏を始めとして非常の多數に上つた。

コンデ・コマの葬禮は、最後の神蹟サククレメントスを受けて、カソリック式に執行され、埋葬には、トリンゲーデ司祭、ミケル・イナシオ師が隨行した。

かくて此の敬愛すべき準市民コンデ・コマの遺骸は、紫布を張つた高價な棺の内に、澤山の生花を以て覆はれ、更に記名入りの數知れぬ花環を以て飾られて安らかに眠つて居た」

伯國人柔道門生の寄せたる追悼文

ベレーン市の一流新聞フォリア・ド・ノルチ紙上に、ブラジルの海軍少佐艦長ルイス・ソーツの名に依つて前田氏に對する追悼文を掲載されて世人を驚かした。是は、同少佐が前田氏の志望翌日リオ・スポーツ新聞に寄せた追悼文を轉載したもので、同少佐は前田氏の生前初段を許された熱心な柔道家である。

以下その前文を掲載する――

「驚嘆すべき日本柔道を紹介せんが爲に、海外に進出した柔道界の諸豪中でも、最も完成された斯道第一人者と謳はれた前田光世氏――コンデ・コマは、パラ州ベレーン市に於て六十三歳を以て一九四一年十一月廿八日逝去した。

當世紀の初頭、同氏は、一團の日本柔道家を率ゐて種々の闘技者を相手に試合を爲しつゝ、日本柔道の紹介のため世界を巡歴したのである。その一行中には佐竹―コマに次ぐ柔道家、小倉等の著名な柔道家も居た。かくて前田氏はリオ・デ・ジャネイロ市に於て或期間の柔道紹介を終つて北方に進出し、やがてアマゾン河口のベレーン市に定住する事となり、佐竹氏はマナオスに赴いた。右兩柔道家共に多數の門下生を持つて居たに拘らず、その中から州外に名を知らるゝ者を輩出しなかつたのは、常に前田氏も言つて居た通り、彼等門生は、柔道の奥義を究める事を爲さずして單に其の外形を習得する事のみに満足したためであつた。唯だ當パラ州からは長く前田氏に師事して、柔道の奥義を知つたと言はるゝ、ペーナ、フェーロの二人を出した。此の二人はまた好敵手に出會はず大いに其の手腕を發揮するに至らないが、併し此の難かしい日本武技の繼承者として若干試合にも成功し、相當の足跡を残して居る。

前田氏は小身ではあつたが（身長一・六六メートル）天賦の、形容に絶した俊敏と、適確に機會を捉へる、信ずべからざるに優れた感覺とを有する強靱そのものゝやうな體軀（體重七五斤）の持主であつた。それで、八ヶ月間、氏と共に生活した私は、氏が武道家として理想的なタイプである事を具さに觀察する事が出來た。更に其の武道家として幾多の傑出せる素質の上に、深い教養と高潔な品性を併せ有して居た事が、氏を知る限りの人々が氏に對して、敬愛と尊崇を惜しまなかつた理由であつたらう。

前田氏の從來行つた幾多の試合に付いて―又氏の著名な門下の人々に付いて―氏の柔道教授法に付いて―六十三歳にして氏が尙は持續して居た武道家としての可能性に付いて―道場の内外を問はず絶對的と言ふべき、氏の謹嚴な人格に付いて―殆んど信ずべ

からざる、氏の幾多の肉體的特點に付いて―更に氏が、我が伯國の武技カポエラや、拳闘を如何に考察して居たか―氏が拳闘家との試合に付き如何なる感想を懷いて居たか―氏の慍悍な鬪争性―氏の本能的といふべき油斷なき注意力に付いて―最後に氏が現在持ち得るであらう最高段位等に付いて、私は是等の點に付いて、機會を得て質問する事を得たならどんなに興味深い事であらうと念じて居たのであるが、氏に接する日の餘りに短かつた爲に之を聽く事を得なかつたのは甚だ遺憾である。私は八ヶ月間毎日二時間づゝの柔道稽古を受けたのであるが、此の短期間では十分に修得する事が出来なかつた。併し私は、眞面目にその期間教へられた處を記録して置く様に努力した。私に取つて遂理論的に知悉するを得なかつた柔道ではあるが、併し六年近い年月、その教へられた處のものを反復して研究に力めて居るのである。その源を支那に發し、更に日本人に依つて完成された此の柔道は、前田氏に依つて、忍耐力と注意力を缺ける西洋人の間に紹介せられて、其の結實を見ようとして居たものである。

柔道を以て、肉體のみならず同時に精神をも修鍊する妙技なりとすれば、我がコマ伯前田光世師こそは、其の究めたる奥義に依つても、又その到達せる人格の高雅より見るも、その鐵石の如き意志より見るも、その底知れぬ信念の堅さから見るも、眞にその代表者ともいふべきでなからうか。氏の逝去に依つて、奇蹟にも近い此の妙技の權化―第一流の典型的敢鬪の魂魄が、遂に我がアマゾン河口から失はれ去つた事を哀む。」

◇ ◇

歐米に於ける前田氏の柔道試合は百戦百勝どころではない。千餘回に亘つて全部勝つた記録なのである。前田氏が強いばかりでない、日本柔道其の物が、精妙な體術として發達し、歐米にはそれだけの工夫修練が積んでなかつたために前田氏は此の千戦千勝を得たのであらう。それにしても單身外國に渡り、一ツ間違へば生命に關はる試合に於て一回も妥協せず、存分の腕を揮つて世界の強力者を制壓したといふのは前田氏の精神力が偉大であつた事を立證して餘りある。

從來幾多の日本柔道家が海外に進展したのであるが、誰人も未だ前田氏の如く華華しい記録を作つたものはなく、恐らく今後とも之を凌駕する記録は出ないのではないかと思はれる。そこには幸運といふ事もあらうが、又前田氏の特異な優越點があつたと言つてよからう。體格の上から小兒あつかひにされる日本人の小身非力も、精神の働きによつて世界の強力者を制壓し得る好き見本が本書に示されたのである。能く、小國の大國、小人と大人といふ事が言はるゝが、我等日本人は、誠に見上げた大國の大人たる實質を有する事を本書に依つて確認し得る事を喜ぶ。

昭和十八年新春

「前田光世の世界制覇」

著者 薄 田 斬 雲

◇ ◇

柔道の開祖たる故嘉納納治五郎先生が講道館を興し、柔道を創設せられてより茲に六十二年、今や我國全般は言はずもがな、世界何れの國に於ても柔道を修行せざる國はないといふ程發展普及したことは、明治以來我國の一大偉業と言ふべきである。先生は日本固有の武道たる柔道を通して、我國の威武を世界に示し、以て國恩に報ぜんことを終生の理想とせられた。故に幾度か歐米諸國を歴遊し、其の都度柔道の術技理論を演述せられて外人をして畏敬推服せしめたのであつた。而して今日までに講道館の段位を授與せる外人は約八十名を數ふるに至つて。而して斯くも比較的短き期間に於て、世界に普及せる所以のものは、一は世界各國に於て柔道以上に優れたる武技がないことを證すると共に、二には各國の強豪者たる者が柔道家と試合して之に勝つことが出来なかつたが故である。故に先生の片腕たる門下の士が先生の偉業を助けて、海外各地に奮闘力戰した偉大なる功績を没却することは出来ない。殊に歐米各國武者修行の末、永らく南米ブラジルに駐まり、コンデ・コマの名を以て外人を懾伏せしめ、昨年彼の地に歿されたる前田光世君は海外に於ける門人中雄の雄たるべき人であり、同君が如何に短軀の我等同胞のために萬丈の氣焰を發揚せしか測り知るべからざるものがある。

昭和十八年三月

「前田光世の世界制覇」の序文

講道館々長

南 郷 次 郎

- 8) IIDA, E., NAKAJIMA, T., MATUURA, Y., TAKEUTI, M., MATUMOTO, D., TANAKA, H., and KOMORI, F: 「The Relationship Between Basic Physical Fitness and Body Fat in +95 category university Judo Athletes」 Research Journal of Budo 30-1: 22-30, 1997.
- 9) 上口孝文, 飯田頼男, 松浦義行, 武内政幸, 中島 隼, 田中秀幸, 高木長之助, 渋谷恒男: 「大学柔道選手の基礎体力の構造—9大学の柔道部員を対象にして—」 國學院大學体育学研究室紀要第22巻, 1992.
- 10) 大滝忠夫「柔道論考」大滝忠夫先生退官記念会, P127, 1972.
- 11) 小宮秀一, 佐藤方彦, 安河内朗: 「体組成の科学」 P6-10, 1988.
- 12) 武内政幸, 飯田頼男, 松浦義行, 西島尚彦: 「大学柔道選手の基礎体力と競技成績の関連について」 武道学研究20-3: 13-20, 1988.
- 13) 武内政幸, 飯田頼男, 松浦義行, 吉岡 剛, 上口孝文, 田中秀幸, 高木長之助, 遠藤純男: 「400m走の基礎体力評価への貢献について—大学生柔道選手を対象にして—」 大東文化大学紀要 (自然科学) 第27号: 217-230, 1989.
- 14) TANAKA, H., IIDA, E., MATUURA, Y., TAKEUCHI, M., UEGUCHI, T., and YOSHI OK, T: 「Ability to keep Standing Posture of University Judoists」 SEOUL Olympic Scientific Congress Proceeding: 795-803, 1988.
- 15) 田中秀幸, 飯田頼男, 松浦義行, 中島 隼, 武内政幸, 若山英央: 「大学柔道選手の基礎体力平衡性評価尺度について」 武道学研究31—別冊 (日本武道学会第31回大会研究発表抄録): 5, 1998.
- 16) 田中喜代次, 稲垣 敦, 松浦義行, 中塘二三生, 羽間鋭雄, 前田砥如矢: 「身体組成評価におけるインピーダンス法の妥当性と客観性の検討」 臨床スポーツ医学第7巻8号, 1990.
- 17) 中邑幾太「柔道の心理学的研究」 中文館書店, P140, 1994.
- 18) 中塘二三生ら: 「インピーダンス法による身体組成の測定」 保健の科学 31: 448-452, 1989.
- 19) Nakadomo, F, et al.: 「Validation of body composition assessed by bioelectrical Impedance analysis」 Jpn. J. Appl. Physiol. 1990.
- 20) 中塘二三生ら: 「Bioelectrical Impedance 法による日本女性の身体組成評価」 体力科学39, 1990.
- 21) 中島 隼, 飯田頼男, 松浦義行, 武内政幸, 田中喜代次, 上口孝文, 稲垣 敦, 田中秀幸, 中野雅之: 「大学柔道選手における瞬発力の連続発揮能力に及ぼす体脂肪の影響」 国士舘大学武徳育研究所武徳紀要第10号: 137-151, 1994.
- 22) NAKAJIMA, T., IIDA, E., MATUURA, Y., TAKEUCHI, M., TANAKA, H., INAGAKI, A., and UEGUCHI, T: 「A Comparison of Factor Structure of Basic Physical Fitness Among University Judoists of Different Weight Categories」 Research Journal of Budo 28-1: 1-12, 1995.
- 23) 中島 隼, 飯田頼男, 武内政幸, 松浦義行, 田中秀幸, 若山英央: 「大学柔道選手の基礎体力評価尺度の構成(その1)—正規性の検討—」 国士舘大学武徳紀要15: 57-81, 1999.
- 24) 中村榮太郎: 「基礎運動能力の各種スポーツ成就に対する貢献度」 体育学研究20-5: 281-292.
- 25) 松浦義行: 体育・スポーツ科学のための統計学, 朝倉書店: 97-103, 1985.
- 26) 松田岩男, 小野三嗣: 「スポーツ科学講座. 9・スポーツマンの体力測定」 大修館書店: 160-227, 1967.
- 27) 松本芳三, 浅見高明: 「写真と図解による柔道」 大修館書店: 158-209, 1966.
- 28) 松本芳三: 「柔道のコーチング」 大修館書店: 350-390, 1975.
- 29) 横堀 栄, 沢田芳男: 「スポーツ適性」 大修館書店: 204-205, 1965.
- 30) 若山英央, 武内政幸, 飯田頼男, 松浦義行, 中島 隼, 柏崎克彦, 石井兼輔, 越野忠則: 「大学柔道選手の基礎体力組テストの妥当性の検討—試合成績との相関関係—」 武道学研究31—別冊 (日本武道学会第31回大会研究発表抄録): 1, 1998.
- 31) Behnke, A.R., and Wilmore, J.H.: 「Evaluation and Regulation of Body Build and composition」 Englewood Cliffs, N.J., U.S.A. Prentice Hall (1974)
- 32) Lukaski, H.C. et al.: 「Validation of tetrapolar bioelectrical impedance method to assess human body composition:」 J. Appl. Physiol 60: 1327-1332, 1986.
- 33) Siri, W.E.: 「Body Composition from Fluid Spaces and Density」 Brekeley, California: